
魔法少女に会っちゃった場合+ ぶらす

作戦参謀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女に会っちゃった場合 + ぷらす

【Zコード】

N1283BA

【作者名】

作戦参謀

【あらすじ】

これは本編で報われなかつたヒロイン達が、幸せ（？）を掴む物語集。本作は【魔法少女に会っちゃった場合】のIF編です。もしも主人公があのヒロインを攻略したら（されたら）……というギャルゲー風IF物語集です。時系列もバラバラですが、一応本編から繋がるようにしております。不定期更新です。

登場人物紹介（前書き）

どうも、始めてましの方もそうでない方も、作戦参謀です！

本作はあらすじにも記載した通り、【魔法少女に会つちゃつた場合】
のアガミ的ギャルゲー風I.F物語集です。

本編の流れが大体分かるようになつてるので、初見の人でも楽し
めると思想いますが、作者としては本編を読んでからこつちを読んだ
ほうが楽しめるかなと思います。

今回は簡単な登場人物紹介です！

登場人物紹介

・藤島圭介

身長172cm、体重59kg 8月生まれ。

県立初芝高校2年4組在籍。

本作の主人公。

体質的に体が丈夫で、B-29爆撃機の飛行高度から落下したり、トラックに跳ねられても生きているほどタフ。基本的には優しい性格だが、変態な上に喧嘩つ早い。その反面自虐的な所もあり、何があると自分のせいだと落ち込んでしまう事もある。

成績は赤点ギリギリレベル。体が丈夫である事と、ある事情からそこそこ喧嘩は強い。

・木下暮葉

身長146cm、体重37kg 6月生まれ。

県立初芝高校2年4組在籍 連邦特殊情報総局アルファ隊所

属、特隊員。

【魔法少女に会っちゃった場合】本編のメインヒロイン。

サヴィエトに狙われている圭介を守るべく、異世界から派遣されてきた魔法少女。魔法少女と言つても魔法が使えるだけで、本人は刀を用いた白兵戦を得意としている。俗に言うアホの子で、性格は明朗快活で人懐っこい。小柄で小動物のような愛嬌を持つている為、人には好かれるタイプ。

何事にも真面目だが、気になる人にはヤキモチを焼く一面も。

・
国宗伊吹
くにむねいぶき

身長151cm、体重40kg 7月生まれ。

県立初芝高校2年4組在籍。

本作のヒロインの一人で圭介の幼馴染。
気が強く素直ではないが、何だかんだ言って圭介ベツタリ。かつてはとても素直で元気な子だつたらしいが、とある一件以降、現在のように強気に振る舞う様になつたらしい。見た目が可愛いから男子にはチヤホヤされ、圭介以外には普通の人なので女子にも好かれ、友達が多い。

ただし恋愛に関してはその性格が災いし、中々前進しない。
朝圭介を起こしに行つたり、圭介と一緒に登校するのはさりげないアピールなんだとか。

・
明智凪紗
あけちなさわ

身長165cm、体重48kg 9月生まれ。

県立初芝高校2年3組在籍。

本作のヒロインの一人で、春に転校してきた超能力者の少女。
普段は容姿端麗、頭脳明晰で真面目な風紀委員であり、教師からも一目置かれる存在だが、バイロキネシス実は戦い方次第で圭介を一方的にボコれるほどの身体能力と、バイロキネシス発火能力という能力が使える。かつては佐井学園という、表面上は進学校で通つていてる場所に通つていたらしい。風紀委員という役職と、人によつては厳しそうに感じるが、実際

は義理堅く人情厚くて優しい性格の持ち主。それ故に女子からもモテるらしいが……？

曲がった事が嫌いで、堂々とした熱い男が好みのタイプ。実はとある戦国武将の子孫。

・青山千早

身長157cm、体重45kg 11月生まれ。

県立初芝高校1年3組在籍。

本作のヒロインの一人で、圭介の後輩。

写真部に所属しており、将来は写真家になりたいと語り夢を持っている。控えめな性格だが、心優しい純粋な子である為、何かと友達には愛されている。しかも控えめな性格のわりには発言がストレートであり、浅間部長を罵る時は圭介以上にキレがよい。

圭介に関するある事情を知っている。実家は市内でも有名な由緒正しき旧家。

・浅間あかり

身長145cm、体重38kg 4月生まれ。

県立初芝高校1年3組在籍。

本作のヒロインの一人で、圭介の後輩。

千早とは対照的な性格で、少し男勝りで喧嘩早い所がある。圭介の悪い噂を聞き、彼を成敗しようとするなど単純馬鹿ではあるが、根は善良で正義感が強い。女版圭介とも捉えられる。

家庭の事情でかなり厳しい生活を送っているが、その時一件で

圭介に対する認識を改め、今は彼の事を敵視していない様子……
：なのだが？

・
藤島葵
ふじしまあおい

身長155cm、体重44kg、5月生まれ。

県立初芝高校1年3組在籍。

本作のヒロインの一人で、圭介の妹。

見た目通り人見知りなどは一切しない社交的な性格であり、交友関係も広く良好で、学力は学年どころか学校全体でも三本指に入る優等生。兄とは対照的な存在だが、大のお兄ちゃんっ子でその愛情はもはや異常なレベルに達している。

前述の通り優等生で、彼女を知らない人にはガリ勉っぽいイメージを持たれるが、実は護身術を習つており不良一人程度なら倒せたり、勉強は出来るけど肝心な所ではアホだつたり、行き過ぎてるくらい変態だつたりと、中身は兄貴そつくりである。

趣味は兄の観察。特技は兄の秘密調べ。料理が壊滅的に下手。ヤンデレの素質あり。

・
早川悠
はやかわゆう

佐井学園在籍（書類上、本人は退学志望）

身長168センチ、体重不明（軽い）、生年月日不明（一応高校生）。

【魔法少女に会つちゃつた場合】の主人公格の一人で、【最強】の名を持つ超能力者。

白い肌に白髪に赤い瞳とアルビノ的な見た目をしており、その上華奢な体格である為、一見弱そうに見えるが【**大気操作**】^{エアオペレーション}という能力を有している。

風や気圧の操作、風を利用した飛行、分子運動操作、酸素濃度の上下や、風や空気を利用をした【反射】や【防御】が出来るなど、大変チートな能力の持ち主。しかし、あまりにも過酷な現実を見て来たせいか気がふれており、人格は破綻寸前。

顔は整つてお、普段はクールでイケメンだが、戦闘時などは狂ったように入が変わり、虐殺的な笑みを浮かべたり、とても人がする事には思えないほど残酷な戦い方を好む傾向がある。

本作でも様々なルートに絡んで……くるかも。

・ 小坂亜紀 ^{こさかあき}

県立初芝高校2年4組在籍

身長162cm、体重49kg 10月生まれ。

圭介や伊吹のクラスメイト。

ぶつきらぼうな姉御口調で話し、かなりアバウトであるが一応クラス委員。恋愛関係のニヤニヤ話が好きらしく、いつも伊吹を圭介絡みの話でいじっている。また、戦国オタという設定があつたが、あまりその設定が生かされた事はない。

とある事情で圭介から感謝されている。スタイル抜群で凧紗に劣らぬ巨乳。

・ 長宗我部大吾 ^{ちょううそがべだいご}

県立初芝高校2年4組在籍。

身長171cm、体重60kg、7月生まれ。

圭介の悪友。

おちゃらけた性格で我欲に素直な男で、圭介ですら引くほど変態。しかし現実の女子には全く興味がないらしく、完全一次元派であり自称【ギャルゲーの神】。

しかし、落とし神の域には達していない。

人柄によらず成績は優秀だが、校則を余裕で破つたりと教師からは問題児扱いされている。

け おんの平沢唯を愛して止まない、かわ唯がモットーな男でもある。

・重原
廣敏

しげはらひろとし

県立初芝高校2年4組在籍。

身長180cm、体重70kg 4月生まれ。

圭介の悪友。

身長が高く筋肉ながら爽やかな男で、その上イケメンなので女子にはモテる。しかし実家は【無差別格闘重原流】の道場であり、本人も重原流武術の使い手。その為今は武に励む事にしており、恋愛にはそれほど興味が無い様子。

実力は高く、不良数十人を一度に相手にする事が出来る……もはや漫画級の強さ。

圭介達とオタク談義に花を咲かせる半面、音楽趣味が小坂と一致しており、2人で話をしたりCDの貸し借りを行つてしたりと、もしかするとお似合いの2人なのかもしれない。

登場人物紹介（後書き）

次回から本編。

最初は圭介の妹・葵ルートから描いていこうと思っています！

突然の居候（前書き）

いつも、作戦参謀です！

今回から葵ルート、開幕です！

時系列的には本編第7話後から開始です。

突然の居候

「……と、いうわけで よろしくお願ひします！」

悪夢だ、俺は今 悪夢を見ている。

先に言つておくが、俺は普通の人間……だと思っていたんだ。名前は藤島圭介^{ふじしまけいすけ}、髪も黒で体格も至つて普通の高校生だ。少しばかり体が頑丈だつたりするが、それ以外は勉強が出来るわけでもないし、魔法が使えるわけでも喧嘩が強いわけでもない。

本当に何処にでもいそつな、才能の【さ】の字すらないしがない高校生……のハズなんだ。

しかし。

そんな幻想は、俺の前でニコニコしている少女に 跡形もなくぶち殺されてしまった。

木下暮葉^{きのしたくれば}。

小動物チックな小柄な体躯。琥珀のよう美しい瞳。小さな桜色の唇に、桃色の日本人離れしたセミロングヘア。何処を見ても可愛らしい美少女だが、服の上から推測するに胸は残念である。

まあ、正直口りもいいよね。俺は美乳派だが……正直口りも好きだ。

「あの、けーすけ様つ。どうかされました？」

「いや、なんでもねえよ……はあ」

「ねえ、あんたさつきからずっとそんな調子だけど……大丈夫なの？」

「」の場には暮葉の他にも、もう一人女の子がいる。ソイツとは昔からの幼馴染で、とある一件以降なんと言えばいいのか……俺に厳しくなつてしまつたのだが、何だかんだ言つていつも隣にいて、何気なかつた日常を今まで一緒に過い」してきたヤツである。

国宗伊吹。
くにむねいぶき

「ソイツもまた暮葉に劣らぬ美少女だ。

ほんの少しだけ青みがかつた銀髪のショートヘアと、ツンとした紅い瞳。そして口を開ければ八重歯が目立つのが特徴的だ。学校でも相当モテるらしいが……告白は全て断つているらしい。

まあ、ソイツの場合は仕方ねえかもな……。

「ねえつてば」

「えつ？」

「悪い……はあ」

「えつ、じゃないわよ。私の事華麗にスルーしまくつてんじゃないわよ」

「けーすけ様……やつぱりサヴィーHトの事、気にされているのでしょうか？」

「あんな話いきなり突きつけられたら、いくら馬鹿なソイツでも傷つくつついの」

「そう、あんな話が原因である。

だから俺、さつきから妙にテンションが低いのだ。

もちろん普段は違うわ。もっと明るく、騒がしい「」く普通の高校

生なんだからな。

つで、俺が何で落ち込んでいるかつーと、さつき暮葉から話された事なんだが……どうも俺って日本人じゃないらしいのよね。その正体はアレクサンドルってヤツの子孫。帝国の皇太子で、その帝国自体は随分前のクーデターで倒されたらしいが、ソイツは皇族で唯一の生き残りらしい。

革命派の弾圧から異世界へ逃れ、苦労して日本国籍を取得し、現在その子孫である藤島家、つまり俺や俺の家族が平和に過ごしているという。

しかし、そんな子孫の中でも一番血が濃いらしい俺を狙い、異世界から封印されたハズのかつて異世界の国、ロジーナを手に入れ圧政を布いていた通称【サヴィエト】の指導者が、どうも俺達が住む世界になだれ込んで来て大暴れしているらしいのだ。

正直事実だとは思いたくないし、聞いた今でも信じられない。

ところがさつき、【サヴィエト】所属の変な狼野郎に襲われたのだ。

それは 暮葉の話が事実である証拠だ。

「この歳で社会に出るよりも厳しい試練しれんを与えるなんて……ああもう！ 不幸だ！」

やつてられるかちくしょう……いつ拉致られるかわからねえじやないか。しかもサヴィエトってなんて言うか……魔法使いと呼ばれる、魔法を扱う者を集めて赤軍を結成し、その数は今や3万を超えているという。3万人の魔法使いが俺の相手だぜ……勝てるわけねーだろ。

クソッ、こんな事なら もつと沢山エロゲーを買っておくべきだった！

「や、やつぱりけーすけ様！ 相当気にしているみたいなのですつ

！？

「アイツ、意外とメンタル弱かったのね……」

「うう～申し訳ないのです、けーすけ様ああ～っ！」

「はあ……ほんと、アイツも不憫よね……」

そんなこんなで、俺は泣きそうになりながら三人で帰路についたのだった……。

……それから數十分後。

「ただいまー」

「ただいま戻りました！」

「葵ちゃん、お邪魔するね」

俺達3人は我が家、つまり藤島家のドアを開け、帰りの挨拶をする。すると、居間のほうからドタバタという物音が響き、数メートル先にあるドアが勢いよく開けられた。

「2人ともおかえり～っ！」

元気よく飛び出してきた少女。ショートの髪を左で結び、そこから一房の髪が伸びているいかにも活発そうな少女は、これまた不思議な事に髪色が水色であった。しかし染めているわけではなく、天然のものらしい。確かに小さい頃からこの色だったよな……というか、お袋と同じ色である。

そんな不思議な髪には一つの小さな鈴があり、そこから黄色いリボンが靡いている。

子猫のような愛らしさを持つ少女の名は葵あおい、俺の妹である。

外見は似ていないが、中身は似ているとよく言われる俺達2人……なんだか不思議だぜ。

「あれ？ 今日はお姉ちゃんも一緒に？」

俺と伊吹が幼馴染ならば、歳が俺達と1歳しか離れていない葵も、当然伊吹の幼馴染。昔は3人でよく遊んでいたし、「イツも伊吹の事をお姉ちゃんと呼ぶほど慕っている。

「あ、うん。たまには葵ちゃんと一緒に遊びますのもいいかなって」「またまたお姉ちゃんったら。いつもお兄ちゃん田舎いなかでなんだよね？」

「う、違うわよー。ああああ、あんな馬鹿……興味ないからー。」

グサツ、と来たぜ伊吹さんよ……まあわかつてたけじや。しかし伊吹もまあ……アレだ、中々ちゅうテしないよなあ。計画的にフラグ建設してるので……もづ伊吹ルートは諦めようかな？
まづ、それでも伊吹をからかうのは面白いし、

「お兄ちゃんを狙つのはこいけど、でも付かなければダメなんだよ？」

「い、言わぬくともこんな奴頼まれなかつたら付き合わないわよー。」

「頼んだら付き合ってくれるのかよー?」

「……!? て、訂正ー、頼まれてもぜえーつたい付き合わないー!」

まあ、わかつてたけどさ……でもまあ、別にそれでもいいか。考
えてみると幼馴染という関係が崩れたら、今まで通りには出来ない
んだよな。進展するか嫌われるかは別にして、俺は今の空気が好き
だからなあ……やっぱり、伊吹は幼馴染のままのほうがいいな。

「……ひふふふ、葵さんはけーすけ様がお好きですね」

「うん、葵はお兄ちゃんが大好きなんだよー。」

「ほんと、葵ちゃんはお兄ちゃんの子よね。こんな兄貴なの……」

「……」

伊吹め……物凄く失礼な事言いやがつて。確かに俺、人として終
わつてるけどさ……。

「……ひふふ、仲睦まじい兄妹ですねー。」

「ハイツの場合は仲睦まじいを通り越してH口睦まじいだ……」

「ひ、ひどー! ? H口は悪くなこよー?」

「突つ込み所そこかよー。」

「当たり前だよ… 葵はね、恋愛なんて別に階段はないと思つてゐるんだよ！？」 さあ、ばあーちこんお兄ちゃん！ 葵はいつでも準備出来てるよ。無理やり膜突き破りのレープでも大歓迎だよ…」

「おいコハラッ！ 女の子が膜を破るだのレープだの、はしたない事言つたじやありません！」

「一かきわどい下ネタだな…… いくら変態の俺でも流石に引くわ。そりやあね、俺だって男だから変態だよ。THE・変態紳士だよ。だけどただのH口と面白いH口は違うんだぜ？」

「あんたら…… 相変わらず変態ね」

「もしかして拙者、物凄い人達と同居する事になつちやいました？」

「頑張つてね木下さん。」この2人は慣れないと正直付合つてけないわよ？」「

「だ、大丈夫なのです… その… ある程度は耐性ありますのでつ！」

「あ、あ、あ… 」

「えつ、えつ、じやあ… 蕁葉」

「えつ、えつ、じやあ… 蕁葉」

「はい。」

あつちはあつちで仲良くなつてゐるし… まつ、あれはいい事だな。

出来れば受け入れたくなかった現実だけビ、いつ見ると暮葉も普通の女の子っぽいし。まあ刀持つてし強いし、オマケに魔法も使って、しかも魔法を使つと滅茶苦茶な事になるけど……それ以外は至つて普通だ。

サヴィエトにさえ氣をつけてればいい……のかな？

とりあえず、俺に言える事は一つだけだ。

それはこれから先 口常が賑^{にぎ}やかになりそうだなつて事だ。

藤島葵 S.ine

「はあ～っ

いい湯だなあ……。

今日はお兄ちゃんといつぱい話して楽しかったし、クーにゃんも一緒に住む事になつたし、お姉ちゃんも今日は葵達と一緒に晩御飯を食べてくれたし、楽しかつたけど疲れちやつたかも。

だけど、楽しい事だったから 疲れもすぐに吹き飛びやうだよ。

「……お姉ちゃんヒクーにゃん、かあ」

今日は楽しかつた反面、葵の中で不安が募つた日でもあつた。だつて、クーにゃんとお兄ちゃん、会つてから時間が経つていなはずなのに、とつても仲良さそうだつた……。

お姉ちゃんがお兄ちゃんに惚れているのは確実。きっと葵と同じ事を考へているはずだよ。

クーにゃんにお兄ちゃんを盗られるんじやないかつてね。

もちろん葵だって警戒しているよ。今はまだ仲のいいお友達程度かもしれないけど、お兄ちゃんって地味にモテるし……あいつと葵にやんもそのうち、お兄ちゃんの毒牙に犯されるかも。

お姉ちゃんだって考えている事は葵と同じ。ひょっとしたら今回の件で、お姉ちゃんがお兄ちゃんのハートをゲットする為に一肌脱ぐかもしれない。お姉ちゃんは気が強くて素直じゃないけど、行動力だけは半端じゃないし……お姉ちゃん、ある意味今までより危険な存在になっちゃうかも。

あつ、そうだ。葵の友達にお兄ちゃんの事好きって言つてる子がいた。その子はお嬢様だしお兄ちゃんとは釣り合わないとは思つけど、でも見た目は可愛いから警戒だよね。

どうしよう、お兄ちゃん……モテモテすぎるのは、このままじゃ、葵のお兄ちゃんが誰かに盗られちゃうよ。お兄ちゃんも惚れっぽい人から、余計に大ピンチだよ……つ。

「ううう～お兄ちゃんが大変だよ大ピンチだよびうじょい……あつー！」

「うだ！ 葵つたら……なんでもうと早く気付かなかつたんだろう？」

普通好きなに何をするつて……そんなの、人類が誕生した時から決まってるよね。

恋愛は早い者勝ち。

お兄ちゃんを早くゲットすれば葵の勝利。

あいつとお兄ちゃん、葵がもつとアピールすれば 振り向いてくれるよね？

確かにお兄ちゃんは実の兄……それは大きな障害かもしれないし、

社会的にいけない事だって自覚はしているつもりだけビ……でも、
それを乗り越えてこそ 真の恋愛だと悟つただよ。
恋に法は関係ない。葵はそう思つてゐるんだよ。

「……お兄ちゃん…待つてね、お兄ちゃん…」

兄と妹と結婚する。

兄は童貞を妹に捧げる。

兄は妹を愛さなければならぬ。

これ、ぜえんぶ葵の中の法律で決まつてゐるんだよ？

だからお兄ちゃん 覚悟していくね？

兄が好きなんですよ

疲れた……とても疲れた一日だった。

風呂上がり、俺はエロゲーをやりながら、ふとそんな事を思つていた。

今日一日だけで随分と日常が変わつてしまつた気がするよ。変なヤツには襲われるし、俺が普通の人間じやないつて事がハッキリしてしまつた。何より……女の子の居候が現れた。

これが美乳のお姉さんならなあ……いや、暮葉も十分需要があるぜ。何も女の子はおっぱいの大きさじやない。むしろ小さいからいいつて事もあるじやねえかよ。

つて……何考えてんだろう俺。

これじゃただの変態じやねえかよ……。

しかし、俺もごく普通の健全な男子高校生だ。性欲くらいあつたつておかしくはない。むしろ一瞬もエロい妄想をしないヤツの神経を疑うぜ。だが、俺はこれでも現実と空想の境目をわきまえている変態紳士なのだ。決して犯罪じみた事はしないし、ただ妄想して興奮して終わらせるだけだ。

それが真の紳士という者だらう。

如何なる時も冷静であれ。そして妄想する時はシチュエーションすらも、完璧に妄想し自己満足するべし。何より、現実の女子には決して犯罪じみた事をしてはいけない。

これが 紳士の必須条件だぜ。

人に嫌われたくは無いから、表向きは真面目な人間を裝つておく。しかし、人間の本質とは表面上の姿からは想像しにくい。例えばいかにも清純そうな女の子が、実は男性関係にやたらとだらしなかつたり、いかにもビッチそうな女の子が、実は滅茶苦茶初心だつたり

……全てありえる話だ。

つまり、上つ面なんて いぐりでも誤魔化せるんだよ。

だからこそ俺は変態を隠すぜ……そして、俺は 変態王になるー。

「…………何考えてんだろ、俺?」

……時々あるよね。

自分が考えてこる事があまりにも馬鹿馬鹿しくなつて、急にテンションが下がる事……。

はあ……Hロゲーでもやつてから寝ようかな。

それから数時間後。今日は見たいアニメの放送日でもないので、とりあえず画面の中にいる嫁の好感度を上げた後、気がつけばもう1時になつていたので俺は寝る事にした。

部屋の灯りを消し、布団の中に入るとしみじみ思つ事があった……。

最近、Hロゲーやってから寝る事が多いんだけどさ……高校生でこの生活つてどうよ?

まず俺は18歳ですらないし、普通ならHロゲーやつちやダメな年なんだよねえ。まあ、アーヴィングで年齢偽ればHロゲーなんて簡単に入手できるけどさ。でも時々思うんだよ……。

こんな事ばっかしてるから モテないんだよねえってさ。

思えば3度の失恋……全部先に男がいたパターンなんだよな。それに懲りて一次元に走り、とりあえず画面の中の嫁で今まで満足していたけど……ああ、やっぱ彼女欲しいよなあ。クラスの連中にも男だの女だのが出来て……ちくしょう。どいつもこいつもリア充しやがつてえ。

俺だつてな、リア充したいですよ。誰かと一緒にクリスマス過ご

したいですよ。それが現実は画面の前で寂しくケーキ食いながら口ゲー……もうクリスマスというよりクルシマスだよ。

「ああ……出会いが欲しい」

今日、女の子とは出会いたけど……あまりにもインパクトが強すぎるのはつーか。その、暮葉はあれなんだよな……刀持ってるし、登場があまりにも電波で、ずきゅ～んと胸に来なかつた……。

伊吹は今の関係のままのほうが俺としては安心だし。

クラスメイトである、友達でもある小坂はなあ……なんつーか、もう友達ってポジションが定着しちまつてさ、そういう感情が沸かないんだよねえ。

かと言つて他の女子とは仲がいいわけじゃないし、事務的な会話しかしないし……。

「あ～あ、誰か俺のこと想い慕つてる可愛い子とかいねえかなあ……」

「……」

あ～、なんか虚しくなってきたし……寝るか。

布団の中に包まり、まぶた瞼を閉じると……やがて、意識が薄れていき

。

がち～ん。

「……ん、んつ？」

もう朝……つて、部屋は真っ暗だけな。

物音が聞こえたから、葵か暮葉が起きたものだと思ったが……違うみたいだな。ベットの近くに置いてある目覚まし時計は、現在時刻が3時50分である事を示している。確かに、夏ならこの時間帯

でも明るいだらうが……今は春だ。4時になつたつて暗いモンである。

だけど、やつきの物音はなんだつたんだらうか……気になるつちやあ気になるが。

ぶつちやけ、確認するのも面倒だし、多分気のせいだから寝むけやおつかな……。

俺は再び布団に包まつ、ゆづくと^{まぶた}瞼を閉じた。

「……つ？」

……のだが、どうも体に違和感を覚えてしまつたので、俺は再び瞼を開ける。流石に天井には何もない。むしろ何かいたら叫びますよ……しかしなんだ、重たいと言つか……。

何か、体が……」れつて所謂金縛りといつやつなのでは?

「あつ、起きひやつた?」

突然、聞こえるハズのない女の子の声が聞こえてきた。やはりこれは金縛りといつやつなのだらう。しかし変だな……手足と首はちゃんと動くぞ?

金縛りつたら普通全身固定、あることは指先が僅かに動く程度なんだけど……。

あれ、なんか……おかしい?

「おはよつ、お兄ちやん」

マウントポジション。

あお向けになつた相手の腰を両足で抱え込むよつこし、馬乗りになる事の格闘技用語。

喧嘩や試合でポジションを相手に取られれば、間違になくマウント

が不利だ。下手したら一方的にボロられてしまうかもしれない……が、女の子に取られると何となく口に気分になれる。敗北感が溢れるハズなのに、でも女の子の場合は興奮してしまつ不思議な体勢である。

そして今、信じられない事に俺は 女の子に馬乗りされているわけだが、

「葵？ 何やつてんだよ、そんな所で？」

「えつ？ うーん……強いて言つなんらば夜間プロレス！」ただよー。

「なんだよ夜間プロレスって！？ 激戦エロスティックな香りがするんですけどー！」

「ん～っと。多分、お兄ちゃんが考へてている事で合つてると細つて？」

？

「マジですか……じゃあ我が残念な妹である葵は、誠に残念ながら兄を夜這いしきたと？」

こつもの、寝る時に来ている淡い水色のパジャマ姿の葵。

「口一口しながら、俺の上に乗つて俺の事を見下ろしてこなが……。

「一応言つとくナビ、まだ3時代だぜ？ ゲームしたいんなら明日まで待てよ」

「ゲームもいいんだナビ、たまにはお兄ちゃんと遊ぶのも……」

「こつも遊んでるだい。つか、遊びたいのも明日まで待つてくれ

それまでに、妹ルートを全力で回避する選択肢を探しだすからさ。システムには喜ばしいシチュエーションだが、俺は至って普通のお兄さんだ。妹は好きだがそういう日では見れんのよ。

ただし、二次元を除く……一次元の妹は可愛いよね。

「ダメだよお兄ちゃん。夜じゃないと雰囲気出ないよ?」

「ですよねー」

マジで何考えてんだ我が妹は。
いや、葵に襲われるのは初めてじゃないが……」今まで大胆な攻めは始めてである。

「あのやあ葵……まさか、今日はガチなのか?」

「うんっー……だつてお兄ちゃん……彼女欲しいんだよね?」

なんでそんな事知つてんだよ。確かに寝る前に声に出して言つたような気もするが……つか、コイツは俺の心を読む能力でも持つてんのか?

とにかく葵さんマジで怖いっすよ。我が妹ながら手強い相手だ。

「欲しごつづーか、そりゃ普通だろ? 男ならな」

とりあえず、この場は無難な回答をして逃れるとしよう。周りの奴らがそんなんだから、少なくともその理論は殆どのヤツに当てはまるハズだ。女子だつて男が欲しいと思つていいしな。

「そうだよね? だから、葵がお兄ちゃんの彼女にならうかなと思つたんだよー」

「いい事を教えてやるわ。俺にコスガる趣味はないぞ？」

「でも、ゲームで妹キャラ攻略してたよね？」

「うう……」

「佐奈がわいいよ佐奈。俺も佐奈に兄さんって呼ばれたいぜっ！ つて言つてたよね？」

「…………」

なんか葵が怖くなつてきた。

確かにそんな事言つた記憶はあるけど……なんでコイツが知つてんの？

「それに、なんで美也が攻略できないの？ 俺もにいにいつて呼ばれたい！ つて言つてたよね？」

「…………」

否定できないのが悲しいぜ……クソッ、俺は肝心な事を忘れていた。葵は兄貴限定のストーキングシスター。略してスト妹だつた事をな。

ちくしょう、ア ガミなんて家でやるモンじゃねえな。

かと言つて学校はPNC持ち込み禁止だし。いや、大吾は普通に持ち込んでるけど……。

「それって、お兄ちゃんがシスコンつて証拠じゃないかな？」

「へりてるよつた間違つてるよつた……」

「めーじの時点で馬鹿でしょ俺、！」は否定しどけよ。
否定できなかつたとか……とんだけ甘いんだよ俺。

「だから、お兄ちゃんは葵の事好きなんだよね？」

「そりゃあ……好き」

「ホントー？ やつたあ！ ジャあ今から葵といへっぱいエッチな
事しようね！」

「テメー！ 人の話は最後まで聞きやがれ！ つか、女の子がエッ
チとか言つんじゃありません！」

「こんな変態なのに、今まで男を家に連れ込んだ事がないのが不思
議だ……。葵、そこまで徹底したブラコンだったとは。正直尊敬に
値するけど、兄としてはありがた迷惑だぞ？」

「えつ？ お兄ちゃん……もしかし控えめな子が好み？」

「やつこつ問題じやねえつて」

「じゃあエッチしよ」

「エイツの頭の中には好きな人＝エッチしかねえのかよ。

今はまだその対象が兄で、俺の理性が働いているからいいとして
……そのうち、エイツも俺から離れて誰かと付き合つ事になるんだ
うつ。だけど、そんな変態思考でいいのか？

なんつーか、葵つてビッチ予備軍つつーか……ヤり逃げされそう

なタイプだよな。

兄として放つておけねえつーか……一度再教育したほうがいいつづーか。

……ダメだ、俺まで変態思考になつて来た気がつて俺は元から変態か。

とにかくこのままじゃダメだ。そう思い、本氣で妹の将来が心配になつてきた俺は、

「お前が、すぐ俺にH口に事じよつぜつと言つてくるけど、そういう事は言わない方がいいと思つぞ?」

「えつ? なんで?」

「なんであつて……相手が俺だからまだしも、世の中悪いヤツがいっぱいいるんだぞ?」

「大丈夫だよ! 薫はお兄ちゃん以外の男の人は、むしろ追つ払うタイプなんだよ?」

「だからつて、お前の即H口な考え方はどうかと思つぞ?」

俺だつて女の子と一度はしてみたいと思つた。けどねえ、一応順序つてモンがあるでしょ?

H口ゲーだと今の俺と薫みたいな、こうこうつシチユHーションから始まる恋もあるけどさ。

「……じゃあ、どうすればいいの?」

「どうすればって……普通テーーーとかを先にしないか?」

「そっか……そうだよな。うん、葵もその通りだと思つよー。」

お前、さつさまで俺に夜這いしようとしてたじちゃん……。

「とにかく、色仕掛けは自重したほうがいいぞ？ 俺ならともかく、俺以外の男に色仕掛けしたら泣かされるかもしねえぞ？」

「……えへへひ。お兄ちゃんつて何だから言つて葵の事、心配してくれるんだね」

何故だか突然照れ笑いをし始めた葵が、嬉しそうに顔を近づけ、俺にそつと言つてきたのだ。

「あのなあ、家族を心配すんのは当たり前だろ？」

「うんっ、そんなお兄ちゃんだから 葵はお兄ちゃんの」と好きになつたんだと思つ

「な、なに言つてんだ……お前？」

一瞬、かあつと顔が熱くなつたような気がした。心臓も一瞬どぐん、と少し鼓動が強まつたような気がした。あれ、おかしいぞ……なんか恥ずかしいつづーか、妙にくすぐつたかつづーか……なんで俺が葵なんかの言葉で照れなきやいけないんだよ？

「葵だつてね、強引な人は嫌だよ？ お兄ちゃんは変態だし、顔も普通かもだけど」

「悪かつたなイケメンじやなくてー。」

「じゃあ世の中は【ただしイケメン】で動いてますよ。ちくしょう、なんでイケメンばつか優遇されるんだよ。それと、変態なのは葵もだろオが……つたぐ。

「でもね、うまく言葉で表現できないけど……一緒にいて一番安心できるんだよつ」

「か、家族だから……じゃねえのか?」

「なんだよ、何か今日の俺変だぜ……。」

「いつもなら素っ気なく葵を追っ払えるつてのに……。」

「それもあるよ。でも葵はね、お兄ちゃんところでキドキするし、ムラムラもするよ。」

「ムラムラは余計じやー。」

「だつて事実なんだもん! とにかく、葵はいつものお兄ちゃんが好きなのー。うまく言えないけど、でもお兄ちゃんが大好きなんだよつー。」

「ほんと、成績は学内3位の優等生の癖に、肝心な所では馬鹿だよな……コイツ。やじがまあ葵らしごっちゃ葵らしごし、むしろ完璧超人じゃないからこそ安心できるんだけど……。」

「つて、アレ? なんで俺まで安心してるんだ? むしろ俺は葵に狙われていて、貞操の危機に直面してるハズなの」

「お兄ちゃん、明後日……いや、正確には明日だけど、暇?」

「明後日かあ……用事とかはねえけど、わ」

「本当にしたかったけど、でも葵……友達と遊ぶ約束しているから だから明日どこか遊びに行こう?」

明日遊びに行こうって……これって、どう考えてもデートの誘いだよな。どうする、別に妹と遊びに行くこと自体は変じゃないか。いや、この歳になつて妹と2人で遊ぶのは流石に変か。でも、なんだろこの断りづらじ空気は。断ろうとしても、言葉が喉を通らない。結局何も伝えられない。

おかしいな……俺つてここまでチキンな男だつたか?
普通なら断るべきなんだろうけど……ちくしょう、断れねえ。
しかも相手は葵だ、断つたら本当に強硬手段に出るかもしけねえ
……。

「……勝手にしろ」

「そ、それってOK……なんだよね?」

「別に、遊ぶ」と自体は変じやねえからな……」

「…………うん! 葵、楽しみにしてるね! おやすみつ、お兄ちゃん!」「

葵は喜んでいた。あんなに輝かしい笑顔を見たのは、かなり久しぶりかもしれない。そんな上機嫌の葵は夜中であるにも拘わらず、大はしゃぎしながら俺の部屋から出ていった。バタン、と。嬉しさのあまりドアの閉め方が乱暴だったが、葵らしいと言えば葵らしい。

しかし、俺も甘いな……断ればよかつたのに。
まあ、一回遊んでやれば葵の気も済むだろつ……
多分。

兄が好きなんですよ（後書き）

・後書きトーク「一ノナ

圭介「この作者つてや、計画性皆無な詐欺師だよね」

葵「なんで？」

圭介「6時に更新すると言いつつ、もう7時だぞ？」

葵「作者曰く、予想外に話が長くなつてらしけど……」

圭介「それも想定して3時間前から書き始めろよ……全く

葵「プロジェクト組んでも結局悩みながら書くんだよね」

圭介「……お前、さつきから作者擁護しそぎだら。お前まさか作者
か？」

葵「違うよー？ だつて擁護してくれたら出番増やすつて作者が

「

圭介「作者アアアアア！ テメエは嫌なプロダクション社長かアアア
アア！」

「」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1283ba/>

魔法少女に会っちゃった場合+ ぶらす

2012年1月8日19時54分発行